

『雑文穿袋』注釈稿(上)

伴野 英一

(国語・国文学)

(令和四年十二月二十六日受理)

はじめに

安永八年(一七七九)序、朱楽館主人(朱楽菅江)作の『雑文穿袋』に注釈を施す。紙幅の都合から上・中・下の三回に分ける。

底本は早稲田大学図書館蔵本(く13 06633 0015)。小本一冊。水色表紙(退色し灰色。一六・二×一・三cm)。題簽は左肩、子持杵「雑文穿袋 完」(九・〇×二・〇cm)。匡郭、口絵二・八×九・〇cm、本文二・七×九・〇cm。漢文序は半丁五行、他は七行罫入。構成は、見返し(黄色地に朱刷「似山先生著 雑文穿袋 東都書林靈山堂」文章星印あり)、口絵半丁(「似山先生像・北尾重政画」)、「雑文穿袋序」(漢文序)二丁、「雑もんせん袋序」(和文序)一丁半、自叙一丁半、本文三十一丁、跋一丁。奥付半丁。全三十八丁半。丁付は一

二十、廿一、廿二、二十三、三十八。奥付「牛込細工町 駿河屋藤助蔵版 彫工 濱村錦治」。

底本の閲覧・使用をさせていただいた早稲田大学図書館に感謝いたします。未だ至らぬ点多いので大方のご批正を乞う。

翻刻凡例

一、翻刻にあたっては可能な限り底本通りにすることを目指した。誤脱と思われる箇所も底本通りに残し、語釈において指摘した。
一、丁移りはその丁の表及び裏の末尾に、表であれば(壹才)(八才)、裏であれば(壹ウ)(八ウ)などと、底本の丁付通りの漢数字と表裏の略記を組み合わせて示した。なお丁付を欠く場合は(丁付

なしオ) などとした。

一、句読点は底本通りとした。

一、仮名は現行の平仮名に改めたが清濁は底本通りとした。明らか
に片仮名で表記しようという意識をもって書かれたと思われる片
仮名は底本通りとした。

一、繰り返しを表す反復記号などは底本通りとした。

一、漢字は原則として新字体に置き換えた。ただし特記すべきだと
考える表記については語釈において指摘した。

一、口絵はこれを省いた。

一、作品・引用文中に現在の人権意識にそぐわない語句・表現があ
るが、歴史的資料である原文を尊重してそのままとした。

《翻刻》

攀^ニ肉^一林^ニ浴^ス酒^一池^ニ驂^ニ變^一童^ラ駕^ス娼^ニ妓^一平^一生^一昼^一寐^一夜^一
寤^自ラ号^ス似^一山^ト果^一是^也 (一ウ)

《語釈》

●攀^一よずる(よづ)。何かに取りすがつてのぼる。すがりつく。
の意。「五街春色^{ごがいのしゅんしよくたうかはす} 鬪^{はんくはを} 繁華^{あひむかへてさらにせうせいふのよきを}。相迎^{あひむかへて} 更^{あひむかへて} 賞^{あひむかへて} 清^{あひむかへて} 芬^{あひむかへて} 好^{あひむかへて}。各自^{かくづ}
争^{あらしよすかいごのはな} 攀^{あらしよすかいごのはな} 解^{あらしよすかいごのはな} 語^{あらしよすかいごのはな} 花^{あらしよすかいごのはな}」(明和五(一七六八)刊『吉原大全』卷之三) ●驂^一

一、そえうま。四頭立ての馬車で外側に配される交代用の馬。「驂^{ソヘムマ}」(『伊呂波字類抄』) ●變^一童^一れんどう。美少年。男色の陰間^{ソヘムマ}・
乗替也(『伊呂波字類抄』) ●變^一童^一れんどう。美少年。男色の陰間^{ソヘムマ}・

野郎。「カレ若年ヨリ。變^{レシ}童^一名娼ノ席ニナレ。ソノスズ道ニテモ。
中^ケ欺^キ騙^ハヲ受ルモノニテナシトカヤ」。 (明和五(一七六八)刊『孔
雀楼筆記』卷之二) ●駕^一がす。(乗り物に) 乗る。「らんよしよく
しやの輦^{こま}も駕^つの。にしきに織^{おり}かへて。朝の霧のほとりには。谷のま
しらの肩^{かた}に駕^かし」(正徳五(一七一五)初演『国性爺合戦』せんだ
ん女みちゆき) ●似^一山^一にたやま。偽物、まがい物の意。「近來^{ちかごろ}
出來^ひる似^に山^の。洒落^{しやれはほん}本のたぐひじやござらぬ。」(安永七(一七七八)
序『傾城買指南所』)

《翻刻》

雑文穿袋序

夫^レ北^方ヲ曰^フ吉^原ト南^方ヲ曰^フ品^川ト東^方ヲ曰^フ深^川ト西^方ヲ曰^フ
新^馬ト四^夷ノ制^度不^レ同^カ或^ハ鬚^髮文^身終^日不^ル火^食粒^食者^一 (二
オ) 有^リ烏^皆其^国之^風ニ而^服飾^和味^亦各^異矣^賓至^レハ其^国ニ
則^使下^ニ女^子ヲ一^応対^セ上^設ケ美^酒嘉^酒ヲ一^以尽^ス二^慇懃^ヲ一^能使^ト二^レ客^ヲ
心^醉一^云フ唯^有二^言語^不レ^通嗜^欲不^ル (二二ウ) 同^レ一^自リハ^非寄^象鞅^記
ニ^一何^ヲ以^カ得^シレ^通スル^{コト}其^志ニ^乎似^タ山^先生^周ニ^旋シ^四方^ニ一^手
取^テ二^鉛槩^ヲ一^以テ^記シ^二方^言ヲ^一臆^ニ積^ソ其^意ヲ^一遂^ニ為^ニ一^卷ト^一後^進ノ^年
少^熟ニ^一讀^セハ^ノ書^ヲ一^則於^ル二^四夷 ^{(三オ) 之}事^ニ一^其猶^キレ^示ガ^二諸
掌^ニ一^乎

倡門 服袴遊撰

印 印 (三ウ)

《語釈》

●雑文穿袋―荻生徂徠著の唐話辞書『訳文筌蹄』（初編…宝永八（二七一一）成）の書名をもじった。●四夷―四方の異民族をいう北狄・南蛮・東夷・西戎の四夷を、江戸の遊所、新吉原・品川・深川・内藤新宿にあてた。以下の行文は『礼記』『王制』による。「中国戎夷、五方之民、皆有其性也、不可推移。東方曰夷、被髮文身、有不火食者矣。南方曰蛮、雕題交趾、有不火食者矣。西方曰戎、被髮衣皮、有不粒食者矣。北方曰狄、衣羽毛穴居、有不粒食者矣。中国、夷、蛮、戎、狄、皆有安居、和味、宜服、利用、備器、五方之民、言語不通、嗜欲不同。達其志、通其欲。東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰詛」●鬚髮―未詳。「髮」の字は「髡」の誤字だとすれば、いずれも「切る」「剃る」の意であるから、「王制」の内容を鑑みても髪形を表していると思われる。●文身―ぶんしん。「文」は文様。入れ墨のこと。「後世遊俠を好む悪少の文身する事《略》もはら行はれしはいと近きこと、みゆ」（『嬉遊笑覧』卷一之下）●火食・粒食―かしよく・りゆうしよく。「火食」は焼いたり煮たりして物を食べることに。「粒食」は米などの穀物を食べることに。●和味―わみ。味を調えること。調味。●嗜欲―しよく。あることを好んで欲するままにしようとする欲。●寄象―未詳。●鞮詛―ていやく。夷狄の語の通訳の意。●鉛槧―えんざん。文筆に携わること。詩文を書くこと。●方言―このころでは、ある特定の職業や場所（遊

里）の中で用いられる言葉の意。「しかし予は当時の流行方言を知らず」（安永九（一七八〇）刊『初葉南志』序）●倡門服袷遊―儒者、服部蘇門（享保九（一七二四）〜明和六（一七六九））の号、蘇門服天游をもじったもの。

《翻刻》

雑もんせん袋序
雛妓問 予曰書物をもよむといひす。鼻毛をもよむといひすが、はなけと書物はおなじ物かへ。予曰。そのやうなあとなひことはいはしやんすのがなをいとしひ。とは手めへか謂哉。夫書の人に益あるや。ちよびとよめは意気。たんとよめはおそろ。出せは高慢。出さねはおくゆかし。鼻毛は（四オ）これに異なり。延ればどうか馬鹿らしく。ぬけはいたくて涙かこぼれる。むかし頼朝公の近臣鼻毛のびたり公命してその妻を出しむ。婦の徳それ可不慎哉。イ、エイナアわつちやそんなことしりいせんか。学とやらのある客人は、いつそ雅馴なことをいひなんすよ。おつなはづ〜みんな孔子のなさつたこと也今度来る時おつな書物をやらうか。それより尔来くなんんすか。（四ウ）くんなんしで。せがみころされ大こまり。朱楽館主人此書を著す。きやつか所謂おつなことなり。読書に益あり。鼻毛に益あり。さてはおんなし物じやよナアと両手をくんでこれに序す。

鬚毛子識

《語釈》

●雛妓―半人前の芸妓。ここでは新造にあてる。「紀南子 駅舎三友を著して雛妓に見せびらかす」(安永八(一七七九)刊『駅舎三友序』) ●あとなひ―あどない(あどなし)。子供っぽい。無邪気であるの意。「大坂町の初会に京橋の馴染を案じる無阿堵さはせめて今の代までも残りし遊女風で御座らふか」(宝暦五(一七五五)刊『禁現大福帳』二之巻) ●おそろ―恐ろしい。または恐れ入ったの下略。「今の身振始終堀川先生でやられたおそろく去ながらさいぜんのおれが由良とは三猴すとふであつた」(安永六(一七七七)刊『郭中掃除雑編』) ●雅馴―おつ。風変わり、妙の意。「読之甚雅馴也」(安永九(一七八〇)刊『遊婦里会談』序) ●尔来―じらい(爾来)。「尔来」(『合類節用集』)「尔」は「尔」と同字) ●寶毛子―「寶」は「あな」。寶毛は鼻毛の意。

《翻刻》

自叙
むかし神田といふところに、公治長といふ人あり、軒に集る雀とす、め、紺屋糊はなめたひかねちかねに舌さられんとことをおそると。相談せしをさとれるよし、それから見ては口はたに、むしやくしやはえた毛唐人も人間に相違はなし、何ぞ詞の(五ウ) かよはさらん

や、さらはまつかく角な文字、ちんふんかんのかんかへて、かの僧語のかはりに用ひ、しかつへらしやくしやれんとて、口から出るはやたらやへち、糸瓜のかはのたんふくる、そこらこくらをさかしもとめ、虎を多かけはそのま、猫爪おしたてかきあつむることしかり、(六才)

安永八亥のとし

正月穀旦 朱楽館主人題

印 印 (六ウ)

《語釈》

●公治長―鳥の言葉を解したという、孔子の弟子で娘婿となった人の名。「公治長といひし人、孔子の弟子也。衛の国より魯の国へ帰られし道にて鳥の鳴声をきけバ、清溪に死人有、いさ行てくらハんといひて、友の鳥と打つれ飛さりけり」(延宝八(一六八〇)刊『囉物語』上) ●ねちかね―ねじがね(ねちがね)。ねじれた鉄。「Nagigane」(『日葡辞書』) ●毛唐人―異邦人を卑しめていう語。「こんなおふじが唐土にもあるかとほるく来ぬる毛唐人は徐福にあらぬ茶一ツふく」(安永八刊『大抵御覽』) ●ちんふんかん―ちんふんかん。言葉が通じず、訳が分からないこと。「夜講釈をきくやうに。清盛だの頼朝だの。仏の千手のと。ちんふんかんで居眠が出来ます」(宝暦六(一七五六)刊『風俗七遊談』二之巻) ●僧語―せんぼう。人形浄瑠璃の世界で使われる隠語の意。後に他の分野での隠語も指し

た。「俏語」の用字は未詳。「そのうへに上方淨瑠璃座の者共の。せんぼうとやらいふて。善事を助右衛門。悪事を助四郎」(宝曆六〔二七五六〕刊『風俗八色談』二之卷)「又商人已下賤き者共おのがどち用る隠語あり。商人はふてふといひ其外はせむぼといふ」(嬉遊笑覧)卷之九) ●糸瓜のかはたんふくろー「糸瓜の皮」は何の役にも立たない、何とも思わないつまらないものをいう慣用句。「コレそんな橘どの夕べひだるひ腹をうめたすかつた恩報に抱の草木へいらざる寸志横合から十割と十六兵へがいらざる理屈とは何夕顔のへちまの皮」(安永九〔二七八〇〕序『神代相昧論』) 段袋は荷物を入れる布製の大きな袋。「なにもいらぬ身なりながらに今日の世をノ麻の皮の団袋哉 行風」(寛文六〔一六六六〕刊『古今夷曲集』卷第九) ●虎をゑかけはそのま、猫―力量のない者が高望みをして失敗する意の慣用句「虎を描きて猫に類す」「虎を描きて狗に類す」による。「但し出家道のみならず侍道にも良きは稀にて悪しきは多し唐土漢の馬援が言葉に虎を画て狗に類すと云へり」(寛文〔一六六一〕一六七三) 初年刊『浮世物語』三の二)

【翻刻】

雑文穿袋

昔時江都揚柳橋の傍に似山先生といふ人有先生姓は高名は慢字は放蕩つなるをいふ浮世しつかり名聞半分郷党の年少を聚てもつはら当世ちよ〜らの学を教ゆ一日先生恍惚として隠几て座すちかきわた

りに住居をなすこはいろ物まねをする奴の此蔵といふ者来りて墨水春を献す先生曰何が故に我に(七才)是をおくるや此蔵曰此酒をきのふもらいましたかわたくし顔に似合ぬ大の生下戸酒やのみせに雨やどりをしても真赤になりやすかういふものなへものだから打捨てて酔にしようよりこれは先生へ上るかよいとやう〜今朝かつかましたといへば先生拜して受此蔵あたまかきなからもてあまし物を上ましたに御慇懃なる御礼いやもう伊丹諸白だそ先生曰むかし夫子に魚を(七ウ)贈るものあり是を売んには市遠く極暑の時分くらかさうよりは聖人に献ぜんともて来るを孔子拜して受いはんや墨水の美酒我豈敢不拜哉今朝入門の束脩にの礼物也巨口細鱗す、はなるものを得たり看あれども酒なき事を嘆じて居た所に汝われに恵に以醇醪さらば一杯傾んといひもあへぬに此蔵(八才)早速厨房に行て料理をなし鱸魚の鱸をもつて酒をす、む先生二三碗のみてわれ今朝の腹合墨水にあらすは不酔松江にあらすは不飽とつや〜見て橙糸縷更、鮮也橙だいぐのこと足下の調理にあらすんば墨水松江ありといふともこれを如何とほく〜醉眠をもよほす此蔵もし〜とおこす先生ウ、ウ、ウンと(八ウ)目をさましはてとろ〜やるうちふしきやな腹の上に木はへしげり胸のあたりを一人通ると夢見たがこれはきはめて瑞雪ならんア、それよ木は、則十八也一人通れば大の字也又通るとは通の事十八大通のしやれ我胸を出すとてふ天の告と覚へたりと又二二杯ひつかけてろ〜眠れば

《語釈》

●昔時—むかし。往時。「昔時道心発しける折節」『浮世物語』四の九) ●江都—江戸。「箱根からこなたに野暮と化もものなしといへとも何ひとつ不足なきお江都となからむ」(『選怪興』序) ●楊柳橋—楊柳はヤナギ。神田川から隅田川へ合流する位置にある柳橋のこと。橋のみならず周囲一帯をいう。船宿が多く、新吉原、深川への出発点となる。「たいていの用はながせと柳ばし」(『川柳評万句合』明和七(一七七〇)宮) ●ちよく—ら—口から出まかせのことを言ったり、見え透いたお世辞をいうこと。また、それをする人。「かける手くちは女郎のうそ。ちよく—ら万八せんみつとは。みなわが宗旨のうそつはちでござる」(安永八(一七七九)刊『無頼通説法』) ●隠几—いんき。「几」(き)は机。「隠」は隠る・もたれる。「おしまづき」は肘を載せて寄りかかる脇息。机としても使用したかと思われる。「一冊の小本となすも十六兵へがほんのむだ書と筆を草家の机に捨ると思へは誠二夢はさめにけり」(『神代相昧論』) ●こはいろ物まね—声色物真似。役者の口吻や動物の鳴き真似をする芸。またそれをする人。「ひくかたるこわいろものまねざをもちてひとをうかしてなぐさめにけり」(明和九(一七七二)刊『猿の人真似』) ●墨水春—墨水は隅田川。春は酒の意。「実浅草川の波静に。恵は清き墨水の。流れにしたがつて」(安永九(一七八〇)序『両国菜』序) ●又唐人名酒為春(『正字通』) よって、浅草並木町の山屋半三郎で売っていた銘酒「隅田川」を指す。「浅草並木町 御用 隅田

川諸白 山屋半三郎」(『江戸買物独案内』) ●生下戸—全く酒が飲めない人。「百毒ノ長たと親父から生下戸」(『柳多留』一二八) ●いやもう伊丹諸白だそ—摂津国伊丹産の銘酒伊丹諸白に「痛み入る」をかけた。「喫郷此間は。御世話因御影ケで。おもしろふ。芝居を。見やした喫郷これは。御礼て伊丹。諸白」(明和七(一七七〇)刊『辰巳之園』) ●むかし夫子に魚を—孔子拜して受—『孔子家語』致思第八にある逸話。「夫子」は孔子の敬称。「孔子之楚。而有漁者献魚焉。孔子不受。漁者曰、天暑、市遠、無所鬻也。思慮棄之糞壤不如献之君子。故敢以進焉」 ●束脩—弟子入りする際に持参する謝礼の金品。「我も彼門出入る事の年を経しほどにまさしく束脩の礼を執るにも及ばでししたしき師弟とはなりたる也」(享保年間(一七一六—一七三六)成『折たく柴の記』上) ●巨口細鱗—口が大きくて鱗が小さい魚。後出、松江の鱸を形容する。「客曰、今者薄暮、挙網得魚。巨口細鱗、状如松江之鱸」(『後赤壁賦』) ●醇醪—じゅんろう。美酒。純粹な濃い酒の意。 ●鱸魚の鱠—(故郷を偲ぶ) 飛び切りおいしい物をいう成語「尊羹鱸膾(鱸膾尊羹とも)」をもふまえるか。「張季鷹辟齊王東曹掾、在洛。見秋風起、因思吳中菰菜羹、鱸魚膾、曰、人生貴得適意爾。何能羈宦數千里以要名爵」(『世說新語』識鑒) ●松江—ずんこう。しゅんこう。中国においてスズキ(に似た魚)で有名。(巨口細鱗の項参照) 「鱸 松江鱸魚巨口細鱗」(『文明本節用集』) ●つや—じつくりと見たり、思ったりするさま。つくづく。「竹斎やがて杖をしてかのはかものがか

ほ、つや／＼よく／＼見すまして」（寛文二二（一六七二）頃刊『竹斎はなし』第卅八）●橙糸縷―糸縷（しる）は糸のように細長いもの。ここでは鱧の具をいう。●足下―自分と同等か、それ以下の相手に用いる二人称代名詞。「ふねいはあさくさむしゆくてござるそつかはゆふべはきだめのなかにおやすみなされたか」（寛政元（一七八九）刊『孔子縞于時藍染』）●ほく／＼―頭を上下するさま。「どちともよきのあしきのとて隔申ことは有べからすと語り給へバ姥かしらほく／＼と打領許て又問」（延宝八（二六八〇）刊『杉楊枝』五）●木は則十八也―「木」の字を「十」と「八」に分解した。●通―遊里を中心に、その空間のみにおいて価値が見いだせるような微細な特殊事情に精通することや人。●十八大通―本作成立当時前後に江戸の遊里にて常識外れの豪遊をするような人たちの総称。「十八」を冠した成語であつて、十八人が固定されていた訳ではない。「今大通の世の中なれば。上は十八大通より。下は一文奴まで。通。の仲ヶ間へ入江町」（天明年間（一七八一）一七八九）成『奴通』）

《翻刻》

此蔵曰今朝先生つかれ給ふ事の（九才）はなはだしきや先生日居われ汝にかたらん疇昔奄崎の孫四郎か許よりわれに双鯉魚を贈る腹の中に尺素書あり古詩客従遠方来遣我双鯉披見るに蘭酒か手紙也らん酒蓋門孫四郎か許にてぐいのみのそれよりそれといふ所を不佞

にはからんとなり不佞さきに北里にいたつて薜蘿館によぎるそれより仙禽樓の忠公が（九ウ）家を主とすあるじとするは居ること三日其家に宿す也に去るまた燕市街の扇樓へ登て花扇に見ゆ女郎買に行也花扇われを容すかまわぬ也又去て中近江屋の半婦に過る半婦わが賢なる事をしらず賢は今いふ通也なはれす深田に入て蛙をふまんやいやなんでも飲んでから策は定むべしと忽一葉をうながして孫四郎が許に（十才）いたりて蘭酒に遇酒半酣なにしてはや五鼓也夜の五つ時をいふ

《語釈》

●疇昔―「疇昔」昨日（「書言字考」）●菴崎の孫四郎―庵崎の料理屋大黒屋孫四郎。鯉料理で有名だったという。「真先向嶋のにぎわる。あまたある茶屋の中にも。田楽はきのえ子屋に名高。鯉はかさる太郎大黒屋孫四郎を最上とし」（安永八（一七七九）刊『百安楚飛』）●尺素書―手紙の意。尺牘。以下の行文は次項の『文選』所収の楽府による。●客従遠方来―中有尺素書―「飲馬長城窟行」中の部分。●ぐいのみ―酒を一気に飲むこと。「酒をのまふといへば。禿がよしなんしと。銚子をかくして。すつきとのませぬ。むりにぐいのみにせうと思へば。女良めが勝手にしなんしと。はらをたつから」（明和五（『吉原大全』卷之二）●不佞―自身をへりくだつていう男性の一人称代名詞。「学者の足下。藩中の貴殿。使者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者は拙者な

り」(安永八・九年(一七八九・一七九〇)刊カ『道中粹語録』)序

●北里—江戸城の北方に位置する遊里である新吉原。「一かふやけの北里は。やけ石に水で。けつく宮作の結構昔に十倍は」(安永二

(一七七三)刊『当世氣とり草』) ●薛羅館—「薛羅」は「ツタ」。

江戸町二丁目の妓楼、蔦屋利右衛門。 ●仙禽楼の忠公—「仙禽」は

「鶴」。京町一丁目の妓楼、鶴屋忠右衛門。 ●燕市街—「燕市街」の

用字未詳。 ●扇楼—江戸町二丁目の妓楼、扇屋宇右衛門。 ●花扇—

扇屋抱えの遊女。 ●中近江屋—京町二丁目の妓楼、中近江屋藤十郎。

●半婦—中近江抱えの遊女、半太夫。「團こへにて半ぶとはへ酒息子し

らねへか半太夫か事さ」(安永六(一七七七)序『売花新駅』) ●賢

—「賢」の用字未詳。本文中に言及があるが、あて字か。 ●一葉—

小舟一艘。「一葉の舟に梶取もなく若き侍の只一人笠ふかくと打

かつぎ」(宝曆一三(一七六三)刊『根奈志具佐』四之卷) ●半酣

—「酣」は、たけなわ、または楽しむの意。酒席が最高潮であるこ

と。 ●五鼓—「鼓」は「鼓」と同字。時報の意。夜の五つ時は午後

八時頃。「後の暮ぞと頼め置く。く。時の鼓を打たうよ」(謡曲『綾

鼓』)

《翻刻》

サア行べしと艫を解て船を乗出せばほどなく堀のさんばしへつく船宿の阿叔出むかへてあしゆくは弟也あにこのあいたに這一向御見へなされませぬか御機嫌よふと言いふ則劍を脱し一茶を吃し茶を一はい直に長堤を過

て大門に入れば花柳の繁栄にとんと風(十ウ)塵をわすれて仙境へ

至し心地す風塵は浮世のことわそれから大門の可礫が所へ行ば老婆出て

何やら愛相をいふ酒肴吸もの種かきいりやうはいたさへあはれ哥妓は女うくく三三問

大の酩酊老婆小厮に何が私語と須臾にして丁香楼の雛鶴ひなつる従容と

して出きたる蘭酒か相あかたか段く数盃かたむけ蘭酒を東道としては蘭酒におぶ

也さる鷄古楼へ登(十一オ)不佞も何とかいふ妓を携へたか沈魚落雁

をほむる詞そ頗美にして艶也左伝語西施毛嬙といふともおさく三

舍をさくべしせいしもうしやうは古の美人三舍をさく不佞を誰にか似たとかや

らいふて欣躍のようすその款待ほとんど興に入りましたあちこちす

るまに更酣也私房くへ引とり茶屋の小厮に鷄鳴に迎に来るべし

と云付て(十一ウ)閨中へ入ル

《語釈》

●艫—振り仮名「ともつる」は「ともづな(纜)」の誤か。「艫」

の用字未詳。 ●堀のさんばし—大川(隅田川)から新吉原方面へ向

かう山谷堀河口岸(今戸橋)にある棧橋。船宿が多く存した。「舟

はかどらすやうくと。今宵の月のいる塩に。堀のさんばしにつき

けるが。堤は品川充まんし。田町口より爪もた、ずと。知なせば鳥

こへより。三谷新町よし原道」(安永七(一七七八)刊『淫女皮肉論』)

●阿叔—本来は父の弟「おとをぢ」をいう。「阿叔 父之弟々字也」

〔新撰字鏡〕親族部十二) ●這一向—「這」は、これ。「一向」

はひところの意。「只因這一向他病了、事多、這大奶奶暫管幾日」(『紅

『樓夢』六五回) ●可憐—男芸者、佳陸(安永八(一七七九)春、萬屋板新吉原細見『扇の的』)か。●哥妓—女芸者の意。「客人などは取つかまつた哥妓や三絃ひきのみじめを見る斗」(文化一〇(一八一三)刊『浮世風呂』第四編卷之中) ●両々三々—両三は二つ三つ、二三の意。「嘉例にて元日に七福と云ふことをする。友達両三人、どうぞ御嘉例の七福が見たいと待うち」(安永一〇(一七八二)序「いかのぼり」七福) ●小厮—小僧。年少の召使い。「隨身常使小厮二名」(『紅樓夢』四八回)「彼幼稚て父母を喪しかば藤市養ひとりてわが子とし片田の浦なる豪家につかはして小厮となしおきつるに」(文化四(一八〇七)刊『椿説弓張月』前篇卷之四) ●私語—「彼女郎舟にのりさまに私語しはこなたは日本の地に居ぬ人じや」と申ける」(天和二(一六八二)刊『好色一代男』卷三の五) ●丁香楼—丁香は丁子。江戸町二丁目の妓楼、丁子屋庄蔵。●雛鶴—丁子屋抱えの遊女、ひなづる。●従容—ゆったりとしたさま。●東道—東方へ赴く旅人をもてなす主人の意。主人となつて来客の案内や世話をする者。「若舎鄭以為東道主。行李之往来」(『春秋左氏伝』僖公伝三十年)「東道 テイシユ」(『唐話纂要』) ●おぶさる—おぶさつて自身の足を使わないことから、他人の力や金に頼ること。「おぶさる 是も人の銭かねであそびに行事也わがものをつかわぬゆへ人につれられねばゆかぬから善光寺の如來のよしみつにおぶさるより出たり」(安永七(一七七八)刊『胡蝶夢』) ●鶏舌楼—鶏舌は丁子。天明八(一七八八)序『傾城觸』でも江戸町二丁目の

妓楼、丁子屋を鶏舌楼と称している。●沈魚落雁—絶世の美女のとえ。もとの逸話は人の美醜の判断は魚や鳥と違い、人間が美人だと思つても、動物たちは見かけたら逃げるだけだという相対性を論じたもの。「毛嬙、麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟」(『莊子』齊物論) ●西施毛嬙—西施と毛嬙。いずれも古代中国において美人として名高い女性。「青黛の眉の渡り丹花の口付キ愛々李の粧ひ芙蓉の眸緑の笄雪の肌へ毛嬙西施は四百余州の沙汰盛り」(安永九(一七八〇)刊『一騎夜行』) ●おさく—確かに、ちゃんとの意。「親くくの女衞縞は富沢町のから衣と飛行着つ、馴たる色紙織に再会しおさく劣し凌の苦しさ」(宝曆五(一七五五)刊『禁現大福帳』二之卷) ●三舎をさく—三舎(舎は軍隊が一日歩いて移動する距離をあらわす)の距離をおく。及ばぬ相手として憚るの意。一目置くことのとえ。「若以君之靈。得反晋国。晋楚治兵。遇於中原。其辟君三舎」(『春秋左氏伝』僖公伝二十三年) ●欣躍—欣喜雀躍の略。●私房—個人の部屋。ここでは各遊女の部屋。●鶏鳴—一番鶏の鳴く明け方。「鶏鳴にはかりことあり奈らの町」(『川柳評万句合』宝曆七(一七五七))

《翻刻》

鴛鴦の衾ふすま女良のぐすと着きの寐ねるとほどなく傾けい来きりてもうねなんしたかとはこを吸すつけさし出し今宵こよひは寒さむふ御ごさんすとやらいひながらぐつと這はい入いて寐ねた所ところか傾か蓋がい宛あ旧識ひとに等ひとし旧識ひとはなしみのことである上じやう

のはなし何やかや種々はなして火坑へ零落したる来由をかたり薄命をなけく芳容まことに(十二才)梨花帶雨たる光景いやもう詞にも述がたし梨花帶雨は美人なげあくわんも述べたし梨花帶雨は美人なげあくわん又一ふく吸付て差出しそれから羅襦玉帯不佞が為に解てとく也ひとよりそふ其肌は凝る脂のことくそのとりなしは漆と膠のことし終に巫山の夢をむすばんと巫山の夢は楚襄王の故事也件の一義をなさんといふ事也として牝口は女の面股の間陰にしてかはいくわく併徊してす、まずてす、まぬ也かの妓只顧鼓を鳴して春心をうごかすつみをならすはしきりにす、むる也佳境にいれは心よくなる也金蓮双鎖して動札す不佞も慢打輕敵の法を以て左支右持の法を用ひければ喘気呼々の具牛喘月がことくしかも蔡妃蕩舟趣あり左伝語大に身を

《語釈》

●鴛鴦の衾―夫婦同衾の寝具。「鴛鴦の衾の内に交せし情はしばしの夢の戯れ」(元禄七―一六九四)刊『好色万金丹』卷之一の(三)●ぐすと―あるものにすっぽりと入り込むさまをいう擬態語。「ヤアア又参つて候と鳴り込むあたまの萌黄頭巾ぐすとかぶつた所は毛があるやらないやら(安永四―一七七五)刊『選怪興』『無腰入道』●傾―傾城の下略。「是はめいわくおらが傾などは今がたやうく来て先あの通り」(『馭舎三友』)●傾蓋―たまたま会つて親しくなること。偶然出会つた程子と(車の)蓋(きぬがさ)を傾けて親しく話し込んだという逸話による。「遭程子於塗。傾蓋而語、終日甚

相親」(『孔子家語』致思)●火坑―地獄にある燃えている穴。人間の煩惱の恐ろしさを火にたとえる。ここでは、遊女に身を落とす事をいう。「彼觀音の力を念ぜば火坑變成池刀尋段く壞と説れしは積尊一時の方便にて」(明和六―一七六九)刊『根無草後編』卷之五)●梨花帶雨たる―美女が悩み悲しむさまをいう「梨花一枝春の雨を帶ぶ」による。白居易の「長恨歌」の一節。●Y鬢―年少の侍女。ここでは禿をいう。「雛妓の鬢差逆に鬢りY鬢の前髪横にみだれ」(寛政三―一七九一)刊『錦之裏』●巫山の夢―成語「雲雨の交わり」の元となる『文選』所収の「高唐賦」による。楚の懷王が宗玉とともに高唐に遊んだ際に昼寝をしていたところ、夢に「巫山のむすめ」と名乗る女が現れ契りを結んだところ、朝は雲、夕には雨となつて訪れますと言つて去つていった。懷王が巫山を眺めるとその通りに雲が湧きたつたので、この神女のために朝雲廟を建てたという逸話。「玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寝。夢見一婦人、曰、妾巫山之女也。為高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。去而辭曰、妾在巫山之陽、高丘之阻。旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下。旦朝視之如言。故為立廟、号曰朝雲。」頂から爪先まで。恋と情を一トかたためにしたる引拔の女良意には。巫山の神女も指をくわへ」(宝曆四―一七五四)刊『当世花街談義』(三)●只顧―「あの妓もくらはれねへやつだおれも只顧嘆息した」(寛政二―一七九〇)刊『繁千話』●鼓を鳴して―攻めたるの意。「小子鳴鼓而攻之」(『論語』先進)●春心―好色な気持ち。「仏弟子の難

陀も美女に春心の過所あり」（天保六（一八三五）序『春色辰巳園』第三編序）

《翻刻》

既に（十三才）雲雨の夢はさめて雲雨の夢は楚襄王故事一義相とくわ初見から赤心済し事をゆめさむるといふ也をあかす不佞を有趣人とおもふ様子じやが所詮楊花水性かと疑ふと見へる不佞も最初はいろくく食言したが食言はことをはむ嘗かつてけい輕薄の兎にあらざる何ぞ虎狼の心をいだかん終に寸丹をあかして来た兎角するうちはや五更天茶屋の迎ひに籃輿を（十三ウ）命めいじて夜深に帰らんとすれば馬鹿らしきままだはやう御さんすといふいや所詮はやくかへらねばならぬ身のうへ幾日にこようと再会をうらやく約して来たか月落鳥鳴て暁のけはや大刀頭のかへるといふ事にたとふ場にいたればそんならあさつて来なんし待てゐんすといふ言なを耳にありて（十四才）恋々としてやまず今朝の空合雨となり雲となりてたゞかの神女がことのみ思ひて神女は昨夜の女らうをさすわすれがたし

《語釈》

●雲雨の夢―巫山の夢の項参照。●赤心―偽りのない真心。「青雲ハ先赤心をこゝろざせ」（『柳多留』一〇五）●有趣人―有趣は興味深い、面白みがあるの意。「やみらめつちやの野父ではいかん有趣人といはるゝうれしきは是大通の一徳と」（安永九（一七八〇）刊『弁豪通人講釈』序）「かみの品しものきざらみ。有趣人の規矩に

つきて」（天明五（一七八五）刊『息子部屋』序）●楊花水性―楊花はヤナギの花。美女をいう。北宋の詩人、蘇舜欽の「春睡」中の「夢似楊花千里飛」による。水性はみずしよう。女性の浮気な性質の意。「水性のざつ書もつらき流の身」（『菊丈万句合』宝曆七（一七五七））●虎狼の心―貪欲で残忍な心。「その父罪ありとてその子に仰せて討せんは民に虎狼のこゝろを教るにあらざる」（文化四（一八〇七）刊『椿説弓張月』前篇第十五回）●寸丹―自身の心をへりくだっていう。●五更天―五更は現在の午前五時前後。夜明け。「昨夜唧唧嘯嘯直聞到五更天才睡下」（『紅樓夢』第四八回）「生憎隣鷄唱五更」（『当世花街談義』三）●籃輿―竹製の駕籠。「徳に人の大門口に至らしむるのはや籃輿は。此にしくもの有べからず」（寛政二（一七九〇）刊『京伝予誌』序）●月落鳥鳴て―本来は「月落ち鳥啼いて霜天に満つ」。盛唐の詩人、張継の詩「楓橋夜泊」による。

以下続く。